



TITLE:

ネルチンスク條約で定めた清とロシアの國境について

AUTHOR(S):

吉田, 金一

CITATION:

吉田, 金一. ネルチンスク條約で定めた清とロシアの國境について. 東洋史研究 1983, 42(1): 62-87

ISSUE DATE:

1983-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153888>

RIGHT:

ネルチンスク條約で定めた清とロシアの國境について

吉 田 金 一

一

康熙二十八年七月二十四日（一六八九年ユリウス曆八月二十八日⁽¹⁾）附で清露の代表がネルチンスクで調印して交換したラテン文の講和條約の第一條は國境を次の通り定めている。

Sagalien Via 河に流入する、タルタル語で Vrum と呼ぶ Chorna [河] に近く Kerbichi 河と名付ける河を兩國の境界とする。また上に述べた Kerbichi 河の源泉の上にある岩または石の山の頂上から、この山の峯峯を経て海に至るまでは、兩帝國の領土を次のように分つ。即ちこの山の南に發して Sagalien Via 河に流入する、すべての土地と大小の河川はシナ帝國の領土とし、山の反對側から北に廣がる、すべての土地とすべての河はロシア帝國の領土とするが、Vrub 河と、境界として指示された山脈との間にある、海に入る河川と土地は暫く定めないままにしておく。これについては兩帝國の大使が自國へ歸還した後、入念に検討し、正確に調査して、大使または文書によって、後に決定する。

やはり上に述べた Sagalien Via 河に流入する Ergone という河を國境とし、その南側にある土地はすべてシナに所屬するが、その北側にある土地はすべてロシア帝國に所屬する。また上記の河の南側の Meyrelke 河の河口に

建てられた、すべての建物は北岸に移される。⁽³⁾

要するにサガリエン＝ウラ即ちアムール河の左岸では、これに注ぐケルビチ河と、その水源からオホーツク海に至る岩または石の山の頂上の線をもって境界とするが、この山頂の線の東端の部分と、ウディ河とに挟まれた地域は、畫定を後に延期する。またサガリエン＝ウラの右岸では、これに注ぐエルゴネ河を境界とするということで、何も問題がないように見える。

ところがG＝カーアンは、「石の山、スヴィヤトイ＝ノス、ウディ河は、當時はどちらにとつても甚だ漠然とした地理學上の語句に過ぎず、レナ河以東、アムール河以北の地は満足な方法では踏査されておらず、ましてや地圖にも載せられていなかった」と書き、⁽⁵⁾清露國境問題について先驅的な研究を發表した増田忠雄も、「ネルチンスク條約の劃界は地域によつて精粗の度を異にし、兩國の交渉の密な〔西方國境〕……は、……比較的詳細な地理的知識を基礎に、河川による線的國境によつて近代的分轄が行なわれたが、……その交渉の粗なる東方國境に於ては單なる觀念的な分水嶺を以て……分割を行ない、條約上は、東方、海に至る外興安嶺の山脈を國境としているが、實際上は兩勢力圏の間の山岳に〔帶狀の〕中間地帯を設定して、その接觸を防止したに過ぎなかった。……〔これは〕その方面……の地理的知識が漠然たるものであったことを證據立てている。……」と書いて、⁽⁶⁾いずれもケルビチ河（ケルビチ河、ゴルビツァ河ともいう）およびエルゴネ河（アルグン河ともいう）方面の國境は、比較的精确な地理的知識に基づいて畫定されたが、東部方面の國境は、お互いに漠然とした地理的知識しかないのに、敢えて畫定したものと見ている。

しかし精确な知識があったという西部の國境にも問題があるという。例えば増田忠雄は、この方面の國境の要であるケルビチ河がそもそも曖昧で、當初は現在のアマザール河がそのケルビチ河であったが、十八世紀初めにはそれが大きく動いて、界碑も現在のゴルビツァ河に移されたと考える。また彼は、東部に至つてはさらに曖昧で、清側が東の要として康熙二十九年に界碑を立てたと伝えられる威伊克阿林は特定の山ではなくて、外興安嶺の東方に延長した部分を漠然と呼ん

だ名稱に過ぎないと主張する。⁽⁷⁾

これに對して筆者は、この時、定めた國境はどのような曖昧なものではないと考えており、既に「郎談の『吉林九河圖』とネルチンスク條約」の中で私見を述べておいたが、⁽⁸⁾これは「吉林九河圖」の紹介を主眼としていたため意を盡すことが出来なかったので、ここで改めて詳しく所見を明らかにしてみたい。

二

そこで先ずネルチンスクで使われた地圖について考えてみよう。記録によると清側は會議に「大人の一人が持っている一枚の大きな地圖」を持って來たが、⁽⁹⁾これには北方のノス山などはなく、アルバジンまでしか描かれていなかった。⁽¹⁰⁾これに對してロシア側は二枚の地圖を持っていたが、⁽¹¹⁾そのうちの一枚はアムール河を中心とする地圖であつたらしい。これは彼等が「それらの領域の一枚の地圖」を見せて交渉したというからである。⁽¹²⁾そこで兩者の交渉の経過を見ると、唯一回の例外を除くと、地圖上の地名や河名の異同をめぐっては争いがなかったから、お互いの地圖の内容に食い違いはなかったものと見られる。その例外というのは、清側が自分の地圖にないノス山を國境として突如提案した際のこと、これはロシア側の抗議で清側もついにこの案を撤回している。

これを見ると、ネルチンスク條約で定めた國境の諸問題を解く鍵は、報告書等の記録以外では、このとき使われた地圖を描いてはないわけであるが、これが今まで等閑に付されて來た。もともと十八世紀のロシアの歴史家Г.Ф.Миллер⁽¹³⁾は地圖の問題に觸れ、清側に同行して來たベレイラ等が、デュアルドの「シナ帝國誌」所載の地圖を使ったと見ているが、この地圖は一七一〇年の實測だから、一六八九年の交渉に使えるはずがない。また最近出た「十七世紀の露中關係」では、ネルチンスク會議後にイエズス會士等がゴロヴィン大使に贈った「中國とその鄰接國の地圖」が會議に使われたと解説しているが、⁽¹⁴⁾これはM.マルチニ作と推定されるから、それであればこの國境畫定交渉などに使えるような地圖で

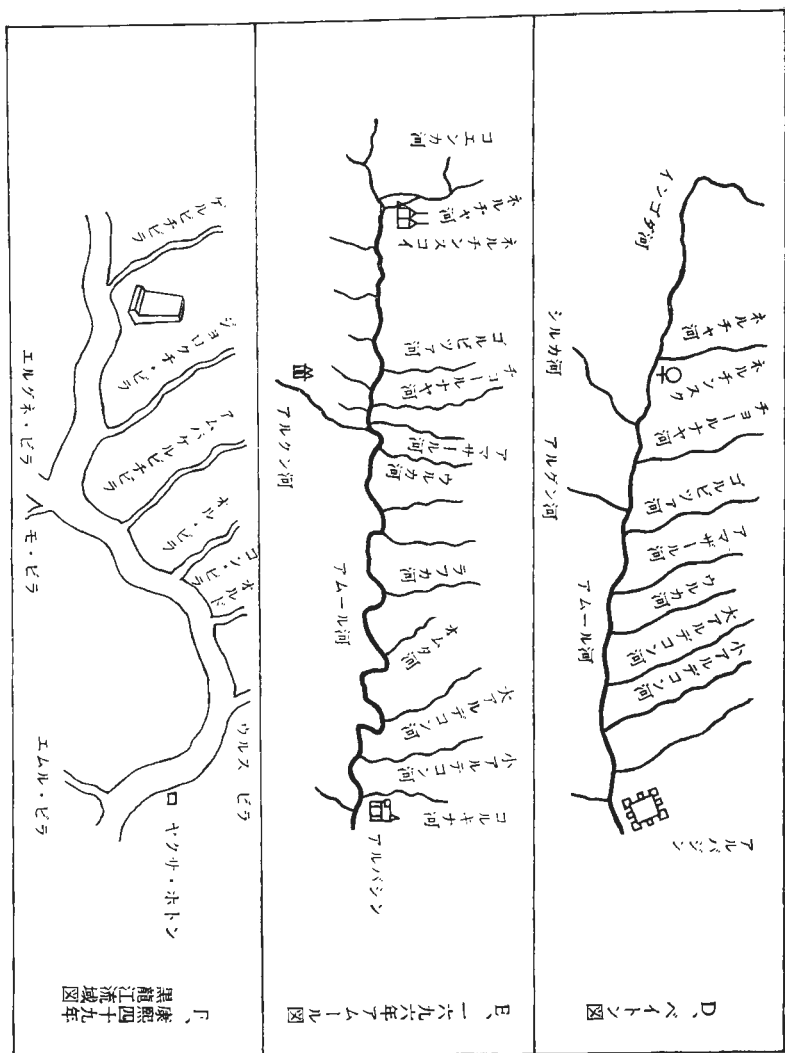
はない。そこで次に當時の地圖を一瞥して、品定めを試みよう。

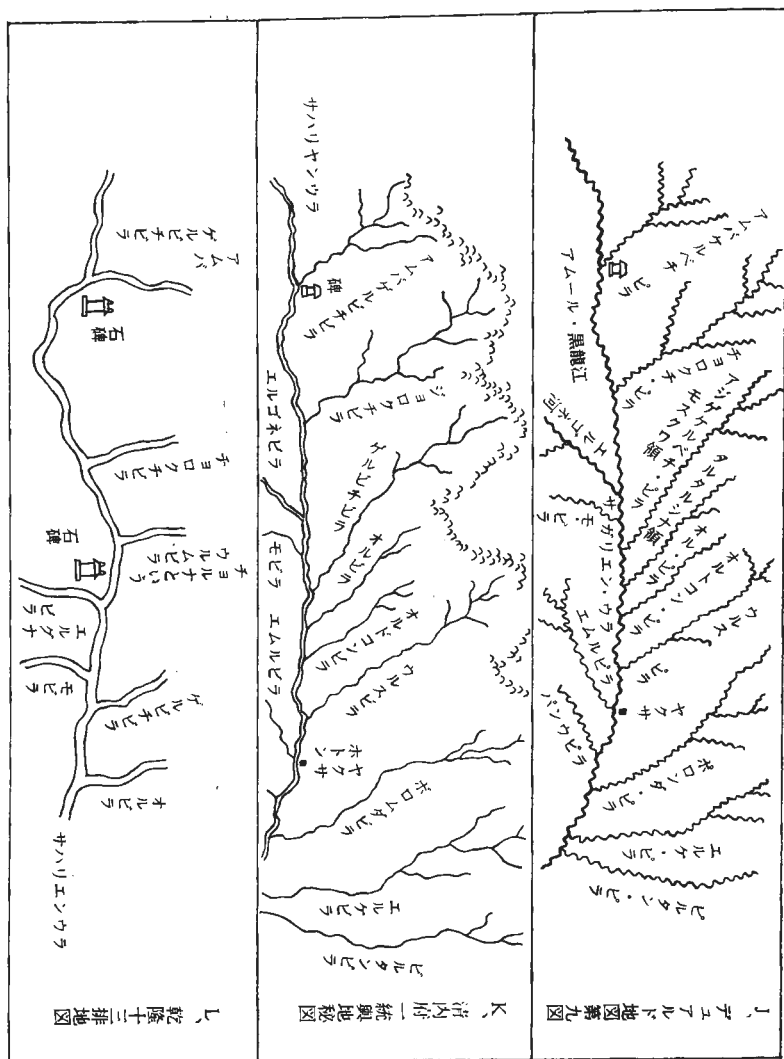
一、トマス圖。イエズス會士A・トマス師が一六九〇年に北京からローマに送った原本によって作つたものなど、現在ローマに二種類あり、その良い寫眞がセベス師の著作の卷末に附けられている。そのうちの一枚には、トマス師が理解したネルチンスク條約の國境畫定が描かれ、先ずアルグン河とケルビチ河が南と北から大體一直線になつて十字狀にサガリエン・ウラに注いでおり、この二つの河が「シナ帝國の境界」と説明されている。次にこのケルビチ河の水源を頂點としてV字狀山脈が描かれ、その東西に走る南邊の山脈を「タルタロ・シナ帝國の境界の連峯」と、また東北に向かう北邊の山脈を「モスクワ帝國境界」と説明し、この兩山脈に挟まれた地域は、「モスクワ人との講和條約で未決定のままである」と説明している。このようにこの地圖は、畫定された國境だけは教えてくれるけれどもそれ以外は描かれておらず、國境畫定交渉には役立たない（第三圖、第二圖H）。

二、羅振玉舊藏圖。滿文、絹本彩繪の東アジア圖。作者、所在ともに不明。稻葉岩吉、船越昭生、W・フックスが既に紹介しているが、記載内容から見て筆者は、一六九〇年ころの作と推定する。この地圖の記載内容も極めて簡略で、國境畫定交渉などにはとても使えるものではない（第二圖G）。

三、イエズス會士實測地圖。康熙帝はイエズス會士に命じて一七〇八—一七一六年に中國全土を實測させ、その地圖が一七一七年に完成したので、これを「皇輿全覽圖」と名付けたが、この地圖はデュ・アルドの「シナ帝國誌」第四卷（以下「デュ・アルド地圖」と）「滿漢合璧清内府一統輿地祕圖」（以下「祕圖」）によつてうかがうことが出来る。なお乾隆帝が補訂を命じ、一七六一年に完成したのが「乾隆十三排地圖」である。以上はいずれも國境畫定交渉に使われるはずはないが、畫定された國境については記載している（第二圖I、J、K、L）。

四、バイトンのアムール河・エニセイ河間の地域の地圖（以下「バイトン圖」）。作者のA・バイトンはアルバジンを死守した名將で、地圖の製作年代については一六八七年、一六九〇年、一六八九—九一年の諸説がある。アムール河はよく出





來ているが、北の山脈と東の海邊がないから、これだけでは國境畫定交渉には不十分である（第一圖D）。

五、一六九六年のCレミョーゾフの地圖帳によるアムール圖（以下「一六九六年アムール圖」）。「十七世紀の露中關係」ではこれを十八世紀初めの作としている。⁶⁹この地圖もアムール河だけなので、これだけでは國境畫定交渉には不十分である（第二圖E）。

六、一六九九年のアムール圖（以下「ペテリン圖」）。現地住民のネルチンスク條約遵守狀況に關する一六九九年のシベリア應報告書の添附地圖をペテリン Petelin が寫したもので、モスクワとパリに現存する。バグロフはこの地圖の原圖は十七世紀中葉の作と見ている。⁶⁰筆者は一九七九年秋にモスクワでKレEレチェレフコ氏からこの地圖について教示を受け、その後も讀みにくいロシア文字を判讀してもらった。その結果この地圖こそロシア側が會議に使った地圖と密接な關係があると確信するに至った。その理由の第一は、國境畫定の全域が記載され、交渉に關聯した地名、河名が網羅されていることである。その第二は、特にゴロヴィーン報告書に見られるオデコン Одекон 河とシャヴリ Шаври 河の名がそのまゝ記載されているのはこの地圖だけで、他の地圖にはないことである。ちなみにオデコン河はアルバジン西方にある現在のオリドイ河で、他の地圖ではこれをオールドコン、アルデコン、ウルトコンとしており、シャヴリ河はウディ河の支流の現在のシェヴリ河で、これは他のどの地圖にも見られない。その第三は、次に述べる清側の「吉林九河圖」の内容と一致することである（第四圖、第一圖C）。

七、郎談作「吉林九河圖」。Wリフックスが北京には該當地圖がないと報告しているの⁶²で、臺北に行つて、一九八〇年正月、國立中央圖書館所藏の、滿文、紙本彩繪のこの地圖を見附け、これについて所見を發表したことは前述した。ちなみに作者の郎談は、一六八二年の對露作戰開始から、條約締結とその事後處理に至るまで、終始露清交渉に關わった人物である。⁶³この地圖には一六九〇年前半にアルグン河左岸に移轉したメイレルケ村が左岸に見られるが、一六九一年城池監造の齊齊哈爾城はないから、これは一六九〇年後半の狀況を描いていると思われる。またアルバジン近傍だけでなくレナ

河水系を描いているので、この地圖は會議に持参した地圖を一六九〇年に補訂したものと推定する。なおこの地圖の右下隅には「五十年十二月十三日」と日附を書入れているが、作者の郎談は康熙三十四年（一六九五）に病没しているから、これは製作後に記入されたもので、例えば内府收藏、轉寫などの日附であらう。この地圖とペテリン圖の内容が符合することは前述した通りである（第五圖、第一圖B）。

八、康熙四十九年黑龍江流域圖。滿文、紙本彩繪で、臺北の國立中央圖書館所藏。これは多分乾隆元年版盛京通志の黑龍江將軍所屬形勢圖の原圖で、「吉林九河圖」の系統に屬し、イエズス會士實測圖の系統ではない。なおこれには界碑が描かれている（第一圖F）。

以上で見た通り、會議の使用地圖は「ペテリン圖」および「吉林九河圖」と近い關係にある地圖と思われるので、次に條約で定めた國境と兩地圖の記載の關係を考えてみよう。

條約は、西部ではケルビチ河とエルゴネ河を國境と定めたが、後者は特に問題がなく、現在も中ソの國境となっている。ところが前者はそうは行かなかった。というのはアムール河に注ぐ、現在のアマザール河もゴルビツァ（ケルビチ）河と呼んだので、シルカ河に注ぐ現在のゴルビツァ（ケルビチ）河と合わせて同名の河が二つあったためである。それでラテン文條約では「サガリエン」ウラ河に流入する、タルタル語でウルムと呼ぶ「チヨルナ」河に近いケルビチ河、滿文では「サハリヤン」ウラに北から入って来た「チヨルナ」というウルマ河の近くにあるケルビチ河、露文では「チヨルナ」河に近く、左側からシルカ河に流入する「ゴルビツァ河」と書いて、國境の「ゴルビツァ河を別の「ゴルビツァ河と區別したが、現地で國境設定 demarcate までにはなかったもので、問題を後に残してしまった。しかし記録の上から見る限り、國境はシルカ河に注ぐ、上流「ゴルビツァ河である。

先ずゴロヴィーン報告書によれば、會議の第四日に清側は「チヨルナ河を國境として提案したがロシア側の反對にあい、第五日には一步退いて「ゴルビツァ河を提案しているから、この河は「チヨルナ河よりも下流でアムール河からシルカ

河に注ぐ河のはずである。

次にネルチンスクおよびアルバジンからの距離を見ると、チョールナヤ河はネルチンスクから七日行程で、この河からアルバジンまではそれ以上かかったというし、この河に近いゴルビツァ河はネルチンスクとアルバジンのほぼ真中だったというから、この二つの河は真中よりも、いくらかネルチンスク寄りであつたらしい。これはゴルビツァ河はネルチンスクから三〇ないし四〇リウ（二〇—一六〇²⁴ 軒）の距離であつたともいうからである。実際に現在の地図で直線距離を測つてみると、ネルチンスク・アルバジン間が約五五〇軒、ネルチンスク・ゴルビツァ河間が約二一〇軒、ネルチンスク・アマザール河間が約四一〇軒である。従つてこれを見ると、上流のゴルビツァ河の方が真中よりもネルチンスク寄りという條件に合っている。次にチョールナヤ河の方が上流、ゴルビツァ河の方が下流で現在のシルカ河を含むアムール河に注ぐという關係位置も、「吉林九河圖」、「ペテリン圖」、「ペイトン圖」および現在の地圖ではその通りで、この點でも上流のゴルビツァ河は條件に合っており、特に條約遵守狀況報告というロシアの公的文書の添附地圖である「ペテリン圖」が、上流のゴルビツァ河は「ゴロヴィーンの條約によつてキタイ人との國境となつた」と註記していることは決定的な意味を持ち、これが國境であつたことは疑う餘地がない。

ところがその前に立ちはだかつてアマザール河國境説の有力な根據になつたのが「デュールド地圖」である。問題の清露の國境の地圖は、その總圖（第二圖一）と部分圖の第九圖（第二圖一）にあり、ともに上流のゴルビツァ河の名稱をアムバ＝ケルベチ河とし、その上流にも下流にもチョールナヤ河はない。このアムバ＝ケルベチ河の河口左岸に、第九圖には界碑があるが、總圖にはない。これに對して下流のゴルビツァ河を第九圖はアジゲ Aigun＝ケルベチ河とし、總圖はエゲ Aigun＝ケルベチ河としているが、エゲはアジゲの誤りであろう。これは滿洲語でアムバは大、アジゲは小で、上流のを大ケルベチ河、下流のを小ケルベチ河としているからである。その上でこの小ケルベチ河の方に總圖も、第九圖も、これをタルタル＝シナとモスクワの國境と明記しているのが問題なのである。しかし「祕圖」や「乾隆十三排地圖」は、

上流のアムバーゲルビチービラの河畔に界碑を描いているだけで、下流のゲルビチービラ（これにはアジゲは冠していない）を清露の國境などとは書いていない。

ここで問題になるのは「吉林九河圖」、「康熙四十九年黑龍江流域圖」等が、「デューアルド地圖」、「祕圖」、「乾隆十三排地圖」等とは反對に、下流のアマザール河の方をアムバーゲルビチ河、上流の方をゲルビチ河とし、その方が實態に合っていることである。確かにアマザール河の方が上流のゴルビツァ河よりも遙かに長大で、アムバの方が相應しいのに、これをアジゲというのは如何にも不自然である。また「デューアルド地圖」がアマザール河を國境とするために、無理に鄰にチョールナヤ河を作ったのもおかしい。これは條約によれば、國境であるゲルビチ河の近くに「ウルムと呼ぶチョールナ河」があるはずだからである。そこで「デューアルド地圖」を見ると、第九圖ではアジゲ＝ケルベチ河の下流に鄰接しているのがオル河となっているが、總圖ではこれを「ウルオン Ourouon 或いはチョールナ河」としてはいるではないか。これはそのままジェルビヨンの佛譯ネルチンスク條約にあり、ウルオンはラテン文條約のウルムに當るから、オル河をチョールナヤ河にし、その鄰のアマザール河をもつて條約で定めた國境にしたことは明らかである。アマザール河をアジゲ＝ケルベチ河にしたのは、イエズス會士等が、國境はアジゲ＝ケルベチ河であると聞いていたためであらう。

ミルレルもアマザール河國境説を支持しており、その理由の一つは、オル河はまたウルカ河と言われ、これはウルム河であり、チョールナヤ河であるという理由である。しかしゴロヴィーン報告書によると、八月二十六日に彼がアルグン河よりも下流でアムール河に注ぐウルカ河を國境にしたいと提案すると、清側では、訓令にはチョールナヤ河を國境とせよとあつたが敢えてゴルビツァ河まで譲ったのに、さらにウルカ河まで譲るようなことは出来ないと言ったというから、ウルカ河とチョールナヤ河は全く別の河である。従つて「デューアルド地圖」の總圖が、オル河またはウルカ河をチョールナヤ河としているのも誤りである。

ミルレルの擧げる第二の理由は、ラテン文條約には、國境のゲルビチ河はシルカ河ではなくてサガリエン＝ウラに注ぐ

とあることで、それでアマザール河を國境と見るわけである。⁶³しかし「吉林九河圖」や「ペテリン圖」だけでなく「デュアルド地圖」でさえも、現在のシルカ河の部分をサガリエンウラ、アムール河などとしているのだから、この理由は成り立つまい。

増田忠雄もミルレル同様、アマザール河國境を採るが、その根據はすべて誤っている。即ちラテン文條約に、境界のケルビチ河の上方にてサガリエンウラに注ぐエルゴネ河とあるから、このケルビチ河はアマザール河であるというが、これは「上に述べたサガリエンウラに注ぐエルゴネ河」の誤譯である。次にアマザール河國境説の弱點は、露文條約にゴルビツァ河はシルカ河に注ぐとあることである。それで増田忠雄は、アルグン河合流後のアムール河をシルカ河とも呼んだというが、當時のどの地圖にも、かかる用例はない。またアマザール河が國境であつたから、その近くにチョールナヤ河があるはずなのに、現在の地圖にはそれがなく、ゴルビツァ河より上流にチョールナヤ河があるのは、界碑をゴルビツァ河に立てた十八世紀初頭以後、條約に合うよう、新たに命名したものだという。しかし「吉林九河圖」、「ペテリン圖」など十七世紀末の地圖にこの河が既にチョールナヤ河になっているから、この説も誤っている。⁶⁴

ところがもう一つアマザール河國境説を支えている話がある。それは十八世紀當時、現地の住民が、條約締結後しばらくは大ゴルビツァ河が國境であつたが、滿洲人が別に小ゴルビツァ河があると知って、勝手に界碑をこれに移したと語つたというミルレルの記録である。注意を要するのは、この大ゴルビツァ河はアマザール河で、小の方が上流ゴルビツァ河だから、「デュアルド地圖」とは大小が反對になっていることである。⁶⁴この話はラヴェンスタインも書いており、清に所屬するツングース人が上流ゴルビツァ河附近に移動したところ、清當局がこれを越境逃亡扱いにした。それで彼は上流ゴルビツァ河こそ正しい國境であると主張して處罰を免れた。その結果、清當局もアマザール河からそこに界碑を移した。これはプーシュキンのネルチンスク長官在任當時（一七〇三—一七〇九年）のことであるという話である。⁶⁵

こつ舌と裏付するような資料は今のところ見附かいていない。はっきりしているのは、「康熙四十九年（一七一〇）黒龍

江流域圖」と一七一〇年實測の「デュールド地圖」の上流ゴルビツァ河左岸に界碑が描かれていることで、いつこれが立てられたのかはわからない。そもそも界碑建立については、ロシア側作成のラテン文條約の末尾に「もしブグディハン陛下が自ら國境附近に記念のために何らかの標識を立て、且つそれらの條項を記すことを欲するならば、我等はこれを觀慮に任せる」とあるのに基づき、條約締結直後の康熙二十八年十二月十四日（ユリウス曆一六九〇年一月十三日）に「まさに議定せる格爾必齊河の諸地に碑を立てて以て永久に垂れ、滿漢字及び鄂羅斯、喇第納、蒙古字を上に勅すべし」という上奏に従い、康熙帝が「官を遣わして碑を界に立」⁶⁷てるように命じたのが始まりである。康熙二十九年三月初五日に工部から黑龍江將軍に致した咨文によれば、この命を受けて翰林院は、額爾古納河口と格爾必齊河口に立てる界碑の碑文を工部に送って來た。これは碑陽に滿、蒙、漢文を、碑陰に俄、拉丁文を勅するようになっていた。工部では、この碑を作るには碑額用には高さ八尺、幅三尺一寸、厚さ八寸の石材を二個、樺子用には高さ二尺二寸、幅三尺六寸、厚さ一尺三寸の石材二個が必要であるが、これを北京で作れば路途遙遠で運輸が困難であるとして、盛京、寧古塔、黑龍江の各將軍に咨文を致して、この寸法に合う碑石が何處にあるか查找させ、また額爾古納、格爾必齊に新定の邊界を查看するために派遣する官員にも托して、額爾古納、格爾必齊或いは此の二箇所の附近の山上にこの寸法に合う石材の有無を查找させ、返回した時に別に議して奏することにした。⁶⁸

郎談傳によれば、彼は康熙二十九年三月、旨を奉じて厄里古納河口に赴き、五月二十一日、同地に至り、碑を河口の石壁上に立て、清、漢、鄂羅斯、蒙古、里約諾の五様の字を鐫り、畢つて還つたと言ひ、⁶⁹皇朝通志にも「康熙二十九年、國書、行書、俄羅斯、蒙古、拉題諾五種、額里古納河の摩崖」とあるが、⁴⁰右の工部の咨文から推すと、郎談の任務は新定の邊界の查看と石碑用材の查找だから、本格的な立碑には至らなかつたであらう。またこの時、郎談はケルビチ河口へは行かなかつたが、これは多分ガルダン軍がこの方面に接近して來たためであらう。

新定の邊界の查看は東方に對しても行なわれた。その詳細は後述するが、先ず柳邊紀略は、康熙二十九年庚午、阿羅斯

國と分界するや、鑲藍旗の固山領眞巴海等は天子の命令で三道に分れて威伊克阿林に至り、その山上に碑を立て、滿洲、阿羅斯、喀爾喀の文を刻したと書いてある。⁽⁴¹⁾ところがその年ジュールビョンも康熙帝から、アムール河口方面へ人を派遣したと聞いたし、⁽⁴²⁾同年北京に來た、ロシア人Γ・H・ロンシャコフもまたアムール河下流方面への清の大軍事遠征のことを報告しているから、この年、この方面の新定の邊界の查看があつたことは間違いない。しかし山上の立碑は西部と同じく本格的なものではなかつたであらう。

康熙二十九年春の工部の石材查找依頼に對して如何なる報告があつたのか、またその結果、どこで石碑が作られたのか等については残念ながら何もわからないが、康熙三十年十二月一日（ユリウス曆一六九二年一月八日）、清の索額圖、郎談等はネルチンスク長官Φ・H・スクリピツィンに行文して、額爾古納、格爾必齊の兩河に界碑を立てるのを、これまで延引して來たと通知しているから、⁽⁴³⁾この段階では兩河にまだ界碑がなかつたわけである。ロシア側の記録によれば、清側はこの延引の理由をモンゴルの情勢に關連づけている。⁽⁴⁴⁾

その後、前述したように、「デュ・アルド地圖」と「康熙四十九年黑龍江流域圖」によつて、一七一〇年にはゴルビツア河畔に界碑があつたことがわかり、さらに十九世紀初頭の嘉慶年間には西清が黑龍江外記の中でこの界碑の存在を確認している。しかしラヴェンスタインによれば、十九世紀中葉にはゴルビツア河畔の界標はピラミッド型であつたというから、當時は界碑が失われていたようである。⁽⁴⁵⁾

「乾隆十三排地圖」にはアルグン河口左岸のロシア領に界碑が描かれている。ところがラヴェンスタインは、アルグン河口に對するアムール北岸に境界の石 frontier stone があつたという。⁽⁴⁶⁾多分後者の方が正しいであらうが、それが石碑であつたか否かはわからない。

以上の通り一六九二年以降は記録がなく、界碑建立の経緯は何もわからない。ただ北京の中國第一歴史檔案館には義和團事件の時ロシア軍に持去られ、一九五六年に返還された黑龍江將軍衙門檔があるので、この中に關係資料があるかもしれない。

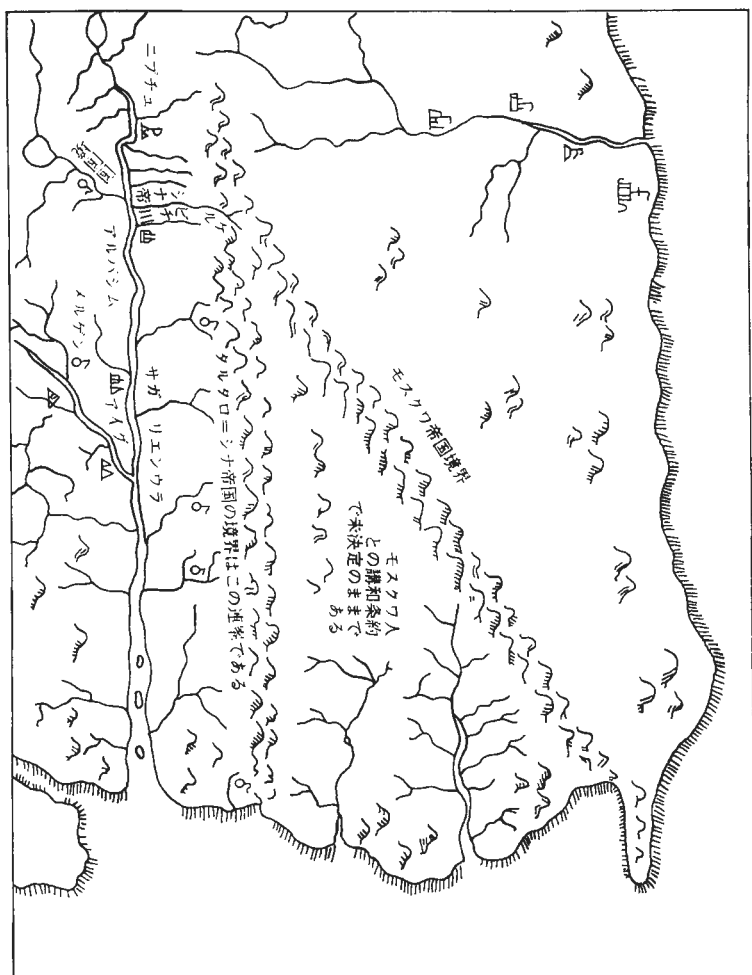
れないと思つて期待している。

顧みるとアマザール河國境説は多くの人を惑わせて來たが、煎じ詰めると、これは北京のイエズス會士たちの思い違ひと獨走に由來すると考えざるを得ない。これを證明するのが「トマス圖」であり、「デュ＝アルド地圖」である。また界碑移建については、もしこれが事實だとしても、それは必ずしもアマザール河と結びつくものではない。というのはこれはアルグン河口からの移建であつたとも考えられるからである。

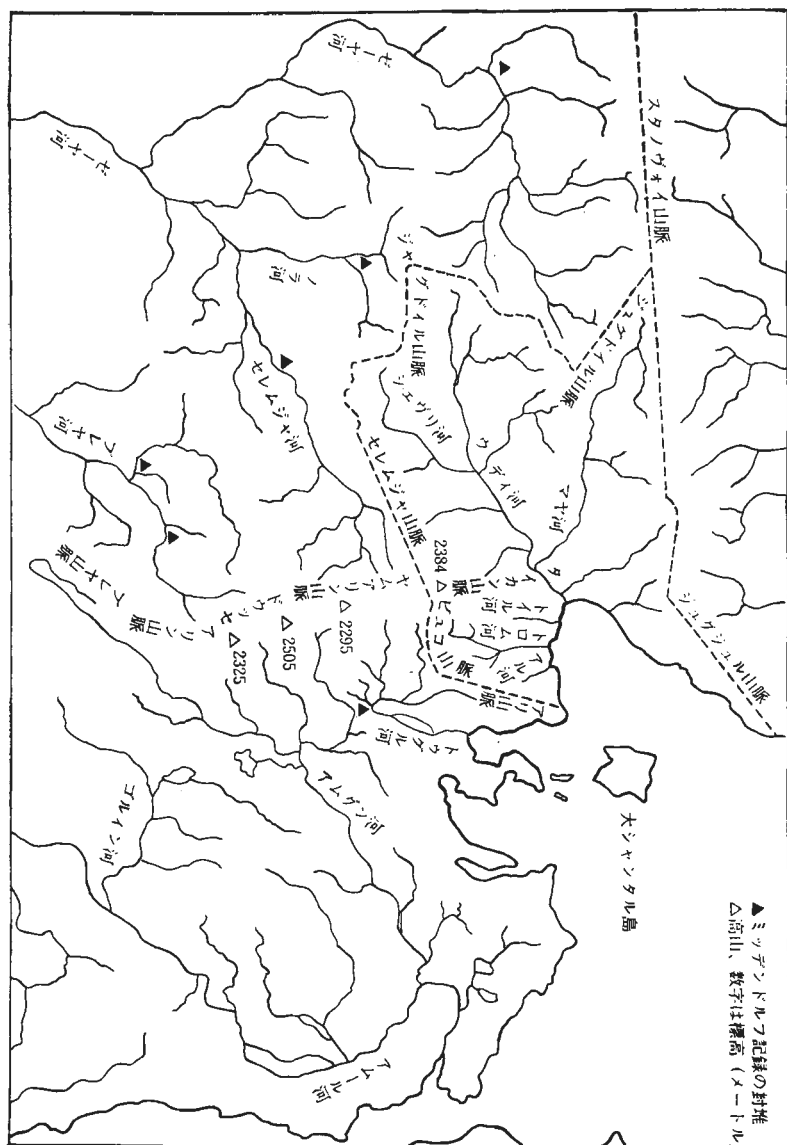
次にケルビチ河から東の國境について考えると、條約によれば、この河の源泉の上にある岩または石の山から海までは、この山脈の頂上の線で分界し、サガリエン＝ウラに河川が流入する側は中國領、反對側はロシア領であつた。ところがケルビチ河は小河川なので、その源泉は直接スタノヴォイ山脈には達しないが、分水嶺を辿って行けばこれに達し、スタノヴォイ山脈の山頂を連ねて境界とすることが出来る。しかしこの山脈は海に近附くと、サガリエン＝ウラにはなく、直接、海に流入する河川に直面するため山脈が屈折し、このあたりが境界未畫定區域として残された。このように國境を畫定できなかったのは、前述したように兩國がこのあたりを満足が行く方法では踏査せず、地圖にも載せず、漠然たる地理的知識しか持ち合わせなかつたためと、カーアンや増田忠雄は見ているが、そうではなくて、雙方とも相當具體的な知識を持っていたと思われる。

その未畫定區域とは、條約によれば「ウディ河と、境界として指示された山脈の閒」である。先に見た「トマス圖」では長大なV字狀山脈の南邊山脈を「シナ帝國の境界の連峯」としているが、これがまさしく條約でいう「境界として指示された山脈」である。「トマス圖」はその山脈の北に二つの河川を描いているが、河名はない。しかし「吉林九河圖」にも「トマス圖」同様のV字狀山脈が見られ、その閒には北にウディ河、南にトロン河があるから、「トマス圖」の二つの河川もこれに違ひない。従つて未畫定地域は北のウディ河とV字狀山脈の南邊山脈の閒であつて、「トマス圖」が北邊山脈を「モスクワ帝國の境界」としたのは誤りである（第三圖、第五圖）。

第3圖 トマス・イエズス會士ベルギー人アソトニー・トマス師が1690年
 [北京から] 送った原本によって作成したオリエントの地圖 (部分)



第6圖 アムール下流方面およびウデア河付近圖



「吉林九河圖」の南邊山脈の南ではトゥグル河が海に注いでおり、薩布素傳は「極爾必齊〔河〕を以て界と爲し、圖古魯河に至る」としているが、これも嚴密に言うとは誤りで、境界はその北に連なる山脈である。しかし現地では未畫定地の範圍を正確に知っていたらしく、十九世紀中ごろ、この邊の住民はトロム河をもって境界としていたとミッデンドルフが傳えているが、ウディ河と南邊山脈の間に境界線を引くとすれば、確かにトロム河あたりが妥當であつたと思われる。

それではこのV字狀山脈は實際にどの山脈に當るかというと、第六圖の中で點線で示したように、北邊山脈はスタノヴォイ山脈とジークジュール山脈であり、南邊山脈はスタノヴォイ山脈から南に分岐して、ウディ河、トロム河等と、アムール水系の諸河川およびトゥグル河を分つ分水嶺に違いない。「吉林九河圖」はこの南邊山脈の南側に、東から西にエルキレ＝アリン Elkiré Alin、デオセ＝アリン Deose、ヤン＝アリン Yang を描いているが、これは第六圖のトゥグル河とアムグン河の水源に北から南に連なる標高二三八四米、二二九五米、二五〇五米、二三二五米の高峯のいずれかに當るであらう。というのはトゥグル、アムグン兩河との關係位置を見ると、實際は南北に連なる高峯を、「吉林九河圖」は東西に並べたと見られるからである。それで筆者は前論文では柳邊紀略の威伊克阿林をエルキレ＝アリンに當て、これを最高峯の二五〇五米の山ではないかとしたが、順序から考へて、四高峯の中で最北の二三八四米の山に訂正したい。これはこの山がセレムジャ、タイカン、ビュコ、ヤム＝アリンの四山脈の交會點に屹立する大山だからで、その南に連なる二二九五米の山が「吉林九河圖」のデオセ＝アリン、次の二五〇五米の山あたりが同じくヤン＝アリンであらうか。ちなみに現在の地圖にあるヤム＝アリン、ドゥッセ＝アリンの山脈名は、後述するように十九世紀になつてミッデンドルフが命名したもので、順序が逆になっている。

この二三八四米の山がエルキレ＝アリンで威伊克阿林だとすると、都統巴海等は一六九〇年に、この山まで來て邊界を查看したことになる。柳邊紀略には、「威伊克阿林は極東北の大山なり。上に樹木なく、惟青苔を生ずるのみにて、厚さ常に三、四尺。康熙〔二十九年〕庚午、阿羅斯國と分界するや、天子、鑲藍旗固山額眞巴海等に三道に分れて往いて視る

ことを命じ、一は亨鳥喇ツァッより入り、一は格林必拉ゲリンビラより入り、一は北海より遶りて入れるに所見みな同じ。時まさに六月大東海尙凍る。とあり、次に前述した立碑のことがある。増田忠雄はこの威伊克阿林を一つの山ではなく、外興安嶺が東に延びる山脈を漠然と指すとし、固山、額眞、巴海の三人がアムグン河（亨鳥喇）、ゴルイン河、海からトゥグル河に分れて入り、別々に山上に標識を残したと解釋した。⁽⁶⁾しかし固山額眞は都統のことだから、この解釋は誤りで、邊界查看部隊は分進して、ともに「境界として指示された山脈」にある大山エルキレ・アリンに達したと見るべきである。

このV字状山脈はもちろん「ペテリン圖」にも見られる。北邊の山脈はウディ河の北にあり、南邊の山脈は同河の水源附近で分岐して南東に走っている。ウディ河の南には無名の河が二つあるが、その一つがトロム河であろう。その次にアラ河があるが、これは現在のアル河である。それから河が四つあり、その次がトゥグル河である。従って「境界として指示された山脈」の末端は、アラ河とトゥグル河の間のどこで海に達しても差支えないが、多分アラ河の南で海に達する山脈をもって境界の山脈としたのであろう（第四圖）。

このようにこの國境畫定交渉は、東部方面についてもお互いの地圖の記載に基づいて行なわれ、國境未畫定の地域を残したのは、雙方の報告書によれば、ロシア側がこの方面の國境畫定について訓令を受けていないためであって、増田忠雄が擧げている地理的知識の不足云々という理由ではない。⁽⁶⁾實際のところ共通した地圖がなければ未畫定地域を「ウディ河と、境界として指示された山脈との間」とすることさえ容易に決められなかったのではなからうか。

三

このウディ河の未畫定國境は、一七二七年のキャフタ條約第七條でも、畫定が後日に延期され、ついに一八五八年の愛琿條約まで、そのままであった。乾隆三十年（一七六五）八月の黑龍江將軍富僧阿等の上奏には、「康熙二十九年鄂羅斯と界を定め、各河源を查勘せる後、従つて未だ往査せず」とあるから、七十五年の間、境界の查勘も行なわれなかったらし

い。それでこの年、査勘を行ない、ゴルビツァ河、ゼーヤ河、セレムジャ河、ブレヤ河を溯った者は、いずれも境界の興堪山に達した。そこで精奇里河、託克河、英肯河、西力木迪河、牛曼河、西勒莫德河の六箇所に封堆を設け、それ以後これを定期的に巡査したという。この六箇の封堆を、ミッドンドルフも一八四四年の旅行で記録しており、彼が實見した一つは、等身大で八立方呎ほどのピラミッドであつたという。

右にいう興堪山とは、スタノヴォイ山脈とこれに連なつて海に至る山脈である。これは滿文條約が境界を「石のある大興安」とし、未畫定地域を「ウディ河より南、興安より北」としているのを見れば明らかである。従つて東部の國境の要となる威伊克阿林（エルキレリアリン）も興安たるべきであつた。それで「吉林九河圖」の三山のうちデオセとヤンの二つのアリンの名はこの後の地圖にも残るけれども、エルキレリアリンはすべて興安となる。即ち「デュニアルド地圖」はこの三山を、東北から西南方向にヒンカン山脈 *Hinkan chaîne de montagne*、トゥッセリアリン *Touxe Alin*、ヤムリアリン *Yam Alin* と並べ、「祕圖」、「乾隆十三排地圖」もこれに倣つている。ミッドンドルフはブレヤ山脈とこれに連なる山脈に命名するに當つて、この中國側の地圖にある名稱を借りて、南からヒンガン、ドゥッセルアリン、ヤムリアリンと命名した。ところがヒンガンという山は他に多いので、シュレンク等の意見に従つてこれをブレヤ山脈に改めたのだという。このような命名法をとつたので、三山の並び方が「吉林九河圖」等とは逆になつてしまった。なお現地住民は、ヤムリアリン等の山名を知らなかつたという。

その後ロシア側は、ウディ河附近の未畫定國境の畫定を清側に提案し、遂に一八五八年に愛琿でその會議を開いて愛琿條約を結び、さらに一八六〇年には北京條約を結んで現在の中ソ國境を畫定し、ネルチンスク條約は無効となつたのである。

註

(1) ソ連にあるロシア文條約の控えは八月二十七日附、ゴロヴィー
ーン報告書にある調印日附は八月二十九日、ラテン文條約は八

月二十八日附（いずれもユリウス曆）である。
(2) 雙方が署名調印したラテン文條約のほか、ロシア側はロシア

文條約に、清側は滿文條約に署名調印をした上でこれを交換した。

- (3) Министерство иностранных дел, *Сборник договоров России с Китаем, 1689—1881*, СПб. 1889, стр. 3—4.
- (4) ヘルチンスクでの交渉の中で清側が國境として提案した山脈が海に突出した部分の名稱。トリス圖や吉林九河圖で見られる。
- (5) Cahen, G., *Histoire des relations de la Russie avec la Chine sous Pierre le Grand*, Paris, 1912, pp. 49—50.
- (6) 増田忠雄『滿洲國境問題』(中央公論社 一九四一)三七—三八頁。
- (7) 増田忠雄「ヘルチンスク條約の國境について」『史料』二六一—五二一六八頁。
- (8) 吉田金一「郎談の『吉林九河圖』とヘルチンスク條約」『東洋學報』六二—一二三—一七〇頁。
- (9) du Halde, *Description de l'Empire de la Tartarie chinoise*, 1735, t. IV, p. 193.
- (10) *Русско-Китайские отношения в XVII веке т. 2, 1686—1691*, Москва, 1972 (ЭЛР РКО, II), стр. 557.
- (11) du Halde, op. cit., p. 57. モスクワの全權が見せた二枚の地圖の中の一枚は、スバファリ作の經緯度線入りのシベリア地圖と推定されるが、該當地圖は未發見である(吉田前掲論文五五頁参照)。
- (12) Sebes, J., *The jesuits and the Sino-Russian treaty of Nerchinsk (1689), the diary of Thomas Pereira, S. J.*, Rome, 1961, p. 245.
- (13) РКО, II, стр. 41, Миллер, Г. Ф., Изъяснение сумнительств, находившихся при постановлении границ между Российским и Китайским государствами 7197 (1689) года, — «Ежемесячные сочинения, к пользе и увеселению служащие», 1757, № 4, стр. 305—321 и др.
- (14) 條約調印の翌日「ペレーラ等はロウヴァーンに地圖を贈った(РКО, II, стр. 601)」。これは一六八五年のМейерニ作の地圖のよう(там же, стр. 793)。この地圖の中のシベリアは逃亡ロシア人から得た情報に基づいて描かれたという(там же, 602)。資料集は「清の代表はこの地圖を使ったと解説して(там же, стр. 41)」。
- (15) Florovsky, A., *Maps of Siberian Route of the Belgian Jesuit, A. Thomas (1690), "Imago Mundi"*, VIII, 1951, pp. 103—108, 著者の著作と註(註2)の96。吉田前掲論文三四—五三一五五頁参照。
- (16) Fuchs, W., *Ueber einige Landkarte mit Mandjurischer Beschriftung*. 『滿洲學報』二 奉天 一九三三 八一—三頁。船越昭生「康熙時代のシベリア地圖—羅振玉舊藏地圖について」『東方學報』(京都)三一 一九九—二一八頁。吉田前掲論文四二頁。
- (17) 矢澤利彦「西洋文化と中國文化の交流」『西歐文明と東アジア』(平凡社 一九七二)二六七—二七〇頁。
- (18) Bagrow, L., *Beiton und Seine Karte von Amur, "Imago*

Mundi", I, Berlin, 1935, pp. 47—48. Bagrow, L., "*Imago Mundi*", XII, Leiden, 1955, p. 126, PKO, II, стр. 611. 田前掲論文四八頁。

- ⑤ Bagrow, L., A few remarks of maps of Amur, ..., "*Imago Mundi*", XII, Leiden, 1955, p. 128, PKO, II, стр. 524.

- ⑥ Bagrow, L., "*Imago Mundi*", XII, p. 128.

- ⑦ ネホン河は PKO, II, стр. 543—544 に「シャヴリ河は *там же*, стр. 557, 561 に述べてゐる。

- ⑧ Fuchs, W., The Peking map collection, "*Imago Mundi*", II, pp. 21—22.

- ⑨ 八旗通志初集卷一五三 郎談傳。

- ⑩ メイン河村にいうのは PKO, II, стр. 794 齊齊哈爾といふのは乾隆元年版盛京通志卷一五。

- ⑪ 註⑥ MID, *Сборник*, стр. 3, 8.

- ⑫ PKO, II, стр. 525, 527, 543.

- ⑬ du Halde, *op. cit.*, т. IV, p. 193.

- ⑭ 「ホルゴソフ河の説明をチャレンコ氏は次のように讀んでゐる。 Река Горбница, по сей реке с Китайским граница с вершинь по опокам сиречь погородам каменным даже до амурского устья амура реки по договорным статьям боярина Федора Алексеевича Головина была граница.

- ⑮ du Halde, *op. cit.*, т. IV, p. 201.

- ⑯ PKO, II, стр. 41.

- ⑰ *там же*, стр. 567.

- ⑱ *там же*, стр. 41.

- ⑲ 増田忠雄「ネルチンスク條約の國境について」五三一—五八頁。

- ⑳ PKO, II, стр. 41. シルヘルは現地の住民からアマザール河が大ゴルゴソフ河と聞いたらしいが、滿洲語はわからなかつたらしい。「チャニフール地圖」にある *негайге* = ケルビチは滿洲語で大ゴルビツナ河の意であるとしてゐる。 *негай* はアジゲ(小)の誤りである。

- ㉑ Ravenstein, E. G., *The Russians on the Amur*, London, 1861, pp. 66—67.

- ㉒ *Sebes, op. cit.*, p. 287.

- ㉓ 聖祖實錄卷一四三。

- ㉔ 故宮博物院明清檔案部藏「北京師範大學清史研究小組『一六八九年的中俄尼布楚條約』人民出版社 一九七七、三九二頁所引。

- ㉕ 八旗通志初集卷一五三。

- ㉖ 皇朝通志金石略卷一一一。

- ㉗ du Halde, *op. cit.*, т. IV, p. 244.

- ㉘ *Русско-Китайские отношения в XVIII веке, том I, 1700—1725*, Москва, 1978, стр. 8.

- ㉙ 『一六八九年的中俄尼布楚條約』三九三頁。

- ㉚ *Русско-Китайские отношения в XVIII веке*, т. I стр. 9. 清の文書の日附が一月十二日なっているが、内容から推して㉙の文書と同じものだろう。

- (65) Ravenstein, *op. cit.*, p. 70.
 (66) *ibid.*, p. 70.
 (67) 陳儀 陳學士文集卷一〇。
 (68) Ravenstein, *op. cit.*, p. 66.
 (69) 吉田 前掲論文 六三頁。
 (70) 増田忠雄「ネルチンスク條約の國境について」六五頁。
 (71) Sebes, *op. cit.*, pp. 267—269, du Haide, *op. cit.*, t. IV, p. 199, PKO, II, стр. 562. 増田 前掲論文 六四頁。
 (72) 高宗實錄 卷七四三。清季外交史料 卷七七 黑龍江將軍恭鏞等奏摺。
 (73) Ravenstein, *op. cit.*, p. 210.
 (74) Милдендорф, А., Путешествие на север и восток Сибири, ч. 1, отд. 2, стр. 201.

〔補註〕 脱稿後、入手した清代中俄關係檔案史料選編第一編（中華書局 一九八一）一八九頁には「康熙三十九年十一月初九日丁酉、理藩院題、……議明春草生時、差遣大臣官員、會同鄂羅斯尼布除城守尉伊繫、定立邊界。上曰、明歲草生時可差一侍郎查立邊界。」（漢文起居注冊）とあるから條約締結後十二年を経た康熙四十年（一七〇一）になって、漸く界碑が立てられたらしい。しかし立碑の場所などはお明らかでない。

また同書の六二七頁には「雍正十二年（一七三四）十二月十四日、領侍衛內大臣英誠公奴才豐盛額等謹奏、竊據費雅喀地方之鄉長端色稟報、恒袞河源與俄羅斯接壤、原將軍巴海曾于該處立牌樓爲界、七八年前、此牌樓倒塌……」（滿文錄副奏摺）とある。これは恐らく威伊克阿林的牌樓のことであろう。

reformation, dependence upon foreign powers was correspondingly deepened. There is an irony in this situation.

The reform movement was a manifestation of the ambition of reformers who were trying resolutely, even by winning the Powers over their side, to enact a reformation of the Qing. But one cannot overlook the fact however that this movement presented an opportunity facilitating the penetration of the Powers into Qing.

THE NATIONAL BOUNDARIES STIPULATED BY THE NERCHINSK TREATY BETWEEN QING 清 AND RUSSIA

YOSHIDA Kin'ichi

When the national boundaries were drawn at Nerchinsk, neither the Chinese nor the Russian side had sufficient geographical knowledge. Therefore, along the eastern border and elsewhere, there remained regions where the national boundaries were not delineated. However, according to written documents, both sides contributed maps for the negotiations. One could postulate that because they had surveyed the zone without dispute, both sides must have had accurate maps. The Russian Petelin map and the Chinese "Nine Rivers of Jilin" map 吉林九河圖 were probably most intimately connected with those used at the negotiations.

Both maps, for example, dispose the theory that Kerbichi River, which formed a section of the western border between two countries, really was the present-day Amazar River, and prove that it was the present-day Gorbitsa River.

Similar clarifications can be made regarding the eastern section of the border. For example, the Weiyikealin 威伊克阿林, surveyed by the Qing in 1690, had nonetheless remained largely uncharted. According to the "Nine Rivers of Jilin" map, it seems to have been recognized that this area lay in the high mountains near the eastern edge of the mountain range designated as the national border. Furthermore, it is possible to read from these two maps the mountain ranges designated as national borders, as well as the extent of the undelineated areas in the vicinity of the Vdi River.

Thus, insufficient geographical knowledge does not completely explain why there remained areas undelineated by national boundaries. As written documents indicate, the fact that the Russian representatives had not received instructions regarding the borders in this region, must also be understood as an important factor.

THE 15-JUAN MANUSCRIPT VERSIONS OF THE *YUANCHAO MISHI* 元朝秘史

HARAYAMA Akira

This essay is a study of the 15-juan manuscript version of the *Yuan-chao mishi*. When the 15-juan text was recorded in the Yongle dadian 永樂大典, it was reedited from a 12-juan text. Today, several manuscript versions of the text have been transmitted. In 1962, an old manuscript of the text was published in facsimile by Palladii in the Soviet Union. By this publication we can easily consult the 15-juan manuscript versions. Concerning the Palladii text, we cannot say that it is authentic. And it seems that the 15-juan manuscript versions as a whole are vaguely regarded as unreliable.

For this essay, I examined the manuscript version formerly in the collection of Lu Xinyuan 陸心源, now kept in the Seikado Library 靜嘉堂文庫. When this text is compared with the Palladii text, the following discrepancies become apparent: there are differences in about 3000 places; the obvious mistakes in the Palladii text do not occur in the Seikado text. Considered from the point of view of the transmission of the printed texts, the large differences between these two versions in extremely close juxtaposition suggest that the manuscript versions of the 15-juan text have many variants.

This necessitates a comparative examination of the other surviving versions of the 15-juan manuscript text. A revised text which can be compiled from the various versions of the 15-juan text must then be compared with a revised text made from the various 12-juan texts. By this work, the superior text of the *Secret History* 秘史 will have been determined.